



幼稚園誕生の時代

— 関信三の葛藤 —

国吉 栄

連載を始めるにあたって

ものごとはじめは、知られているようで案外知られていないものである。

日本の幼稚園のはじまりについても、たくさん書物が書かれているが、まだ、わかっていないことのほうが、ずっと多いのではないだろうか。

たとえば、日本の幼稚園は、どのような経緯でつくられたのだろうか。イニシアチブをとったのは誰だろうか

か。開国間もない困難な建国の時代に、なぜ幼な子のための新しい教育施設をつくろうとしたのだろうか。なぜ日本の幼稚園は、当時世界で類を見ない国立の幼稚園として出発したのだろうか。最初の幼稚園は本当はどんな保育をしていたのだろうか。草創期の幼稚園はわからないことに満ちている。

今回とりあげる関信三も、幼稚園草創期のなぞのひとつである。

関信三は、明治九年、湯島の東京女子師範学校（現

在のお茶の水女子大学)に幼稚園が付設された時の、最初の園長(当時の職名では監事)である。彼は幼稚園に関する著作を次々に発表するなどして、幼稚園の紹介発展に功績を残した人物であったが、その生涯は長いあいだなぞに包まれていた。のちに明らかにされるところによれば、彼はかつて政府の謀者としてキリスト教阻止のために働き、ついには偽って信仰を告白し、洗礼まで受けた僧侶であったという(注)。

このことを知って、私は関信三という人物に、少なからぬ興味を抱いた。キリスト教諜者という、いわばキリスト教に敵対する思想を持っていたものが、キリ

スト教思想の産物ともいえる幼稚園にどのように出会い、またその紹介発展にどのように関わってきたのか。ミスマッチともいえるこの出会いは、関信三にとって、また幼稚園にとって、どのような意味を持っていたのだろうか。

私がこうした関心を抱いたのはもうずいぶん前のことになるが、幸いなことに、この数年、じっくり関信三の研究に取り組むことができた。今回の連載では、その一部を交えながら研究余滴ともいべきものを綴って、関信三の生涯と彼が生きた時代、そして日本の幼稚園草創期の姿をラフスケッチしてみたい。

(一) ぶるさとの関信三

安休寺を訪ねて

関信三のふるさととは、三河国幡豆郡一色村、現在の

愛知県幡豆郡一色町である。一色町は、知多湾にのぞむ矢作川河口の農漁中心の町で、古くは海上交通の要地として栄えた港町であった。

関信三は、天保十四（一八四三）年の正月二十日、一色町の真宗東本願寺派安休寺に、第二十二世雲英^{キョウ}元了の五男一女の末子として生まれた。彼が生まれたとき父はすでに亡く、十二歳離れた長兄が父の跡を継いで安休寺二十三世となっていた。

私が初めて一色町を訪れたのは、十数年前、日本保育学会が知多半島の日本福祉大学で開かれた時のことである。その途上、同窓の先輩の先生方の後について、関信三の生家である安休寺を一色町にお訪ねした。

案内してくださったのは、安休寺第二十八世雲英元寿氏と、郷土史研究家杉浦廉平氏であった。杉浦氏は『一色町誌』（一色町誌編纂委員会 昭和45）の関信三の項を執筆された方である。『一色町誌』の記述はごく短いものではあるが、内容の信頼性は極めて高い。

それ以前から興味を抱いていたものの、将来関信三

について書くことになろうとは思いません、今から思えば、なんとせいたくな時を無為に過ごしたものかと思ふ。今ならお尋ねしたいことが山のようにあったのに、その時は、ただ交わされているお話を聞いているだけだった。それでもこの時の安休寺訪問は、私の関信三研究の原点にある忘れがたい思い出となった。ひなびた町のたたずまいと、ポカーンと明るい、いかにも大洋が近いことを思わせる開けた視界が印象的だった。

お話のあと、住職夫人は私どもを本堂裏手の墓地に案内してくださった。ここは子ども頃の関信三の遊び場でもあったらうと思うと、静かな墓地が親しいものに感じられた。仏教に不案内な私にはそれがどの寺院の墓地にも見られる形なのか、真宗独特のものなのか判断できなかったが、古い墓石がたくさんかたまっているあたりには、石の角柱の上に丸い石がのって、その上に四角垂の石を置いた墓が多くあっておもしろかった。それらのどれもが、長い間の風雨によって角

がとれ丸みを帯びていた。

「恩物のようだ」と私は思った。幕末動乱期に生き、思いもかけない生涯の果てに、関信三は幼稚園に出会う。彼はその時初めて目にしたためずらしい遊具に「恩物」という名を与えたが、それらの遊具のなかに、なつかしい何かを感じたのではないか。生家の墓地をめぐりながら、私はそんなことを考えていた。

しかし、関信三自身の墓所は、ふるさととの寺にはなく、東京、谷中の宗善寺にある。彼の墓碑は、彼の死を悼んだ教え子たちによって建立されたもので、フレールベルの墓と同じ形、立方体と円柱と球からなる第二恩物を模して作られている。古い『幼児の教育』に掲載された教え子の手記をたよりに、津守真氏が谷中の宗善寺に関信三の墓碑を捜し出したのは、今からおよそ四十年前のことである。

今彼の墓碑は、本堂の裏手にひっそりと立っている。恩物を模した墓碑のわきには、関信三の生涯の軌跡を知った遺族の手によって、昭和五十三年に石碑が

建てられた。

ふるさとの関信三伝

関信三のふるさとには、もうすっかり忘れられてしまった小さな関信三伝が残っていた。小菅廉編纂『尾参精華』（秀文社 明治32）に掲載された「関新吾」と題する。五百字足らずの、郷土の偉人顕彰的人物伝である。そこに記された「秀才―洋行―幼稚園開設の祖」という文脈からは、彼の秘められた過去に関わる一切がスッポリ抜け落ちている。それは書き手の故意ではなく、知らなかつたためであろう。これが、郷里で生きつづけた関信三伝であった。

関信三の過去、特に彼がキリスト教の洗礼を受けた、という「事実」は、たとえそれがキリスト教探索



のための手段であったとしても、故郷ではとうてい受け入れられないものだったと思われる。

明治四年春、一色町の近くで数千の農民門徒を巻き込む一大騒動があった。当時、新政府はキリスト教を禁じていたばかりでなく、仏教に対しても厳しい締めつけ政策をとっていた。ある日のこと、真宗寺院の存亡の危機に直面した僧侶たちが血誓書を懐に役所に抗議に向かった。ところが、これを聞きつけた周辺の農民門徒たちが、「大勢の坊さんたちがヤソ退治にゆかれるから、われらもお助けにいこう」と次々に竹槍をもって集まってきたという。これがついには暴徒と化し、役人ひとりを殺害するに至る。「門徒たちはその首を切り落として、「それヤソの首だ」、「ヤソを討ち取った」と高く掲げて寺に持ち込んだ。

この騒動の首謀者として僧侶ひとりが斬首刑、役人殺害の罪で門徒ひとりが絞首刑、逮捕されたもの数百人に及んだという。このあたり一帯を揺るがせた大騒動であった。

関信三が洗礼を受けたのは、この騒動の翌年、明治五年のことである。どんな事情があったとしても、ふさとの門徒たちに僧侶の受洗など受け入れられるはずはなかった。

関信三の生地三河は、いわゆる真宗地帯と呼ばれる地域である。一色町自体、狭い範囲に五十か寺を擁する仏教地帯であるが、その三分の一は真宗の寺院で、その大半を東本願寺派の寺院が占める。しかも彼の兄は、当時真宗の中でも名のある僧侶で、門徒からあがめられる郷土の誇りであった。兄は、その「事実」を隠さざるをえなかったし、また、隠し通した。ふるさとが関信三の過去について知るようになるのは、ずっと後になってのことであった。

二度目の訪問

二度目に一色町を訪れたのは、平成十年、そろそろ原稿がまとまりかけた頃だった。その日は梅雨明け前にもかかわらず真夏を思わせる暑さだった。名古屋電

鉄の西尾駅に、一色町の牧野哲也氏が迎えてくださった。牧野氏の父上堯氏は、昭和の初めに一色町で私立保育園を始めた方であったが、園長室の壁には、関信三の大きな写真が飾ってあったという。倉橋惣三『日本幼稚園史』に掲載されている写真である。関信三は、故郷が生んだ幼児教育の先達として、尊敬されていたのであろうか。

牧野氏は愛知県文化財保護指導委員であり、一色町のとりの西尾市の教育委員会文化振興課の仕事もなさっている地方史研究家であった。西尾市には岩瀬文庫という西尾市が誇る貴重な文庫がある。関信三伝が掲載されていた『尾参精華』は、岩瀬文庫所蔵のもので、そのことを教えてくださったのも牧野氏であった。貴重本を保護するためにコピーが一切許されていないので、牧野氏はわざわざ手書きで写しを作ってくださいました。

牧野氏の車で一色町に向かった。三河一色駅に行く

には吉良吉田を起点とする名鉄三河線があるが、本数が少なく不便とのこと。一色、西尾間を結んでいるバスもあるが、やはり便数は少ない。

一色町のとりの吉良吉田は、吉良上野介の郷である。このあたりはもともと雲母キョウモの産地で、「吉良」の名もそこからきたのではないかと考えられている。安休寺のあたりも古くは吉良の庄に属していた。安休寺の住職は代々、「キラ」を名乗るが、赤穂浪士の討ち入り以後、累を怖れて雲英キョウとしたという話も伝えられている。

杉浦家の駐車場に車を置かせていただいて、安休寺に伺う。

住職夫人は、私がお訪ねした者のひとりであることを、かすかに覚えておいでだった。住職二十八



世雲英元寿氏は、「あの人は早くにここから出ちゃつて、キリスト教の方に行つたからわかりません」とおっしゃつたが、一方で、「兄はのろまだけど、弟はしっかりしていた」、「兄は因妙院になつたが、弟ならもつと偉くなつただろう」と古老が語っているのを何度も聞いたことがあると話してくださつた。

お話を伺いながら、故郷を捨てて別の世界に旅立つた者に対する屈折した感情が、故郷には今なお流れていることを感じた。穏やかな口調で話してくださるどつしりとした体軀の元寿氏は、『一色町誌』に載つていた関信三の兄、晃耀コウヨウの肖像と大変よく似ておられた。外の暑さが嘘のような庫裡は明治期に建て替えられたもので、関信三の頃のものではないという。けれども、長押に掲げられている、元寿氏がご自分で表装なさつたという晃耀の立派な書と、晃耀に似ておられる元寿氏を前にしていると、関信三の生家にいることが実感された。晃耀の書には「高倉学寮第二十世講師晃耀」と署名されていた。兄の名は、この地では今な

お高く尊い。

「Ishiki」

安休寺でお話をうかがっているところに、故杉浦廉平氏夫人みち子氏がおいでになつた。「私のところに置いてほこりにしておくより、あなたに差し上げたい」と持つてきてくださったのは、一枚の古い板であつた。勢いのある墨跡はどうやら「Ishiki」と読める。署名は「信三関」。なんと、洋行直後の関信三の揮毫であつた。

英文字で書かれたふるさとの名と、「信三関」の署名。己の過去を封印し、「洋行帰りの関信三」として彼はふるさとに帰り、ふるさともまた彼を受け入れた。故郷に帰れた喜びと晴れがましさと、しかし一方では過去も含めたそのままの存在としては帰れなかつた関信三の苦さが表れている揮毫である。みち子氏のご厚情に感謝するとともに、ふるさとでこの書を書いた関信三の胸中に思いを馳せずにはいられなかつた。

おそらくこれが彼が故郷に残した唯一の存在証明であり、また故郷との決別の証だったのではないだろうか。

一色町からの帰途、私は片時もこの板を手放さなかった。大きな古い板を大事そうに抱えて歩いている姿は、おそらく奇妙なものであつたらう。けれどもそんなことは気にもならず、生きている歴史に直接触れているようで、うれしくてどきどきしていた。その感覚を今も思い出す。

関信三の揮毫は、今、わが家の居間のかもいの上にある。いずれしかるべきところに寄贈するつもりであるが、関信三研究が完成するまで、関信三の書を見ながら執筆するという、思いもかけない幸いを得たことを感謝している。

次回は、ふるさと一色を旅立った関信三が、幕府崩壊後の動乱期をどのように生きたかについて書いてみたい。

注

関信三の過去について最初に伝えたのは、大正十年十一月十日付の「福音新報」というキリスト教界の新聞であった。

のちにその事実は横浜市史の教会の稿に取り入れられ（昭和7）、それを読んだ倉橋惣三らによって『日本幼稚園史』（昭和9）に紹介されることになり、保育史に興味を持つもの共通知識となるに至った。

しかし、これまでこの興味深い人物を正面から扱った研究は驚くほど少なく、保育研究の分野では、久しく、津守真氏の関信三研究（津守真「関信三の幼稚園紹介」／『幼児の教育』第61巻2号、昭和37 および「関信三の生地を訪う」『文明開化と幼稚園紹介』補遺）／『幼児の教育』第67巻8号（昭和43年）がほとんど唯一のものであった。

また最近になって、立浪澄子氏によって「猶龍—安藤劉太郎—関信三の軌跡」が日本保育学会（平成4）において発表されている。